

## OB訪問

東京都心から1時間ながら、豊かな自然を残す八王子市。天狗伝説の残る高尾山のみもとで約90年の歴史を刻んできた駒木野病院が藪下さんの職場です。精神看護一筋17年、精神系疾患・こころの専門病院の看護科長として活躍中です。

## 駒木野病院 看護科長

藪下 祐一郎さん（看護福祉学部 看護学科1999年卒業）



## 精神看護にめざめ一念発起

藪下さんは本学在学中の実習で精神科分野に強くひかれ、専門病院を就職の第一希望としました。精力的に全国の病院を調べ中、精神科医療の質向上に情熱的に取り組む駒木野病院と出会い、一念発起して就職しました。精神看護へのわき上がる興味が、新卒での専門病院就職、出身地・札幌を離れる不安に勝りました。卒後17年の現在は看護師24名、看護補助者4名で年間300人以上の患者さんを受け入れる精神科救急病棟の看護科長です。

## 15年ぶりの患者さんに教わる

藪下さんが看護科長になったのは20代後半。若いだけに「自分の中の看護科長はこうあるべき」という概念に縛られ、臨床能力・経験不足を意識せざるをえず、周囲との距離感をつかむことも難しかったです。相当肩に力が入っていました」と言います。少し自信がつき、自然体で自分の力をそのまま出せるようになったのは、2012年に立ち上げを任された救急病棟が軌道に乗ったあたりからだったといえます。

看護師として成長するにはさまざまな場所での経験を積み、学ぶという道もありますが、藪下さんは一つの病院で精神科の臨床を極める看護師となりました。そして、定点をもった者だからこそ

得られる手応えを強く感じています。「新人の頃担当した、当時10代の患者さんが15年ぶりに再入院され、『お互い年取ったね』『頑張っていたんだね』と何げない言葉を交わしたとき、患者さんと共に年を重ねていく、10年を超え長期的に予後を見ていける精神看護の大きな魅力をもた一つ発見した思いでした」。

## 患者さんのために垣根を越える

駒木野病院は一般精神病棟のほか2つの精神科救急病棟、全国でも珍しい児童精神病棟、認知症治療病棟を有し、アルコール総合医療センターを開設するなど精神系疾患、心の病を広くカバー。その他SSK（サービスステーション 駒木野）では患者教育プログラムや家族心理教室などを実施しています。医師、看護師、薬剤師、リハビリテーションスタッフ、ソーシャルワーカーや心理士、栄養士など多職種が連携して医療サービスを提供し、退院支援のケースカンファレンスには地域の関係者に参加してもらうこともあるといいます。デイケア、訪問看護ステーションとも密接な連携が欠かせません。藪下さんは科長として病棟内の看護師を束ねながら、常に他の職種はもちろん、地域との連携を視野に入れ、患者さんのためにこのチームで自分は何ができるかを考え、行動しているといいます。



卒業式の後に同期と撮った1枚。中央が藪下さん。左から2番目の明野伸次さんと右端の神田直樹さんは共に本学講師として活躍中。

## 家族の思いに耳を傾ける

藪下さんがとくに力を入れているのは、患者さんの家族のサポートです。病棟だけでは家族が精神科医療にどんな期待を寄せているのか、患者さんとどんな気持ちで接しているのか、ゆっくり聞く機会が足りないと、2カ月に1回のペースで「家族のためのサポートグループ」を開催し、統合失調症の患者さんの家族が思いを共有できる場を提供しています。「どうやって医師に相談したらいいのかわからない、具合の悪い家族ともう一緒にいたくないと思うことは悪いことなのか、そんなご家族のお気持ちを伺うようになり10年以上になります。ご家族のお気持ちにしっかり耳を傾け、その期待に応える病棟づくりに生かすことをめざしています」。

## 「変わらない」安心感

看護師として着々と経験を積み藪下さんですが、いまでも学生時代の実習の緊張感、新人の頃の丁寧さなど「初心を忘れないこと」を心がけているといいます。「尊敬する先輩がみなそうしていると思うからです。経験や知識がどんなに増えても、目的や看護へのスタンスは変わらない。それが患者さんに安心感を与えます」。

大学卒業時に思い切って踏み出した一歩、その熱い思い、覚悟は繰り返し立ち返ることでいっそう強さを増しているようです。



「さまざまな人を対象にする仕事です。男性、女性、どちらかに偏ることはよくない」と言う藪下さんは、看護師として男性であることを特に意識したことはないそうです。「男性・女性より、まず看護師であること」。



同じ病棟で本学の後輩も活躍中。写真は田村那津美さん（2015年卒）。管理職としての藪下さんの心構えは「スタッフには平等に接する」「スタッフの力を信じる」。